

# カナダの文学

## その特徴と歴史の変遷

### ジョージ・ウッドコック

カナダにおける文学活動の誕生は、ロバート・ヘイマンがニューファンドランド最初の植民地の総督になった一六二一年にまで遡ることができる。ヘイマンは、この地において、カナダに関して最初の詩を書いた。これは「クアドリベツツ(混成曲)」という題の、エビグラム(風刺詩)ならびに小詩で、一六二八年にロンドンで出版され、当時の英国王チャールズ一世に捧げられた。

カナダで書かれた最初の小説は、それよりおよそ一世紀半もたった頃、やはりロンドンで出版された「エミリー・モンテギュー物語」である。作者はフランス・ブルック夫人というケベック駐屯隊員の妻で、サミュエル・ジョンソン博士の知人でもあった。彼女は永住するつもりでこの地に来たものではなかった。作品は一種の風俗小説で、もし後世のカナダ小説および小説家達の関心事と共通する特徴がなかったならば、英軍の小さな駐屯地ならどこでもありそうな単純な筋立ての風俗小説として終わっていたであろう。しかしこの小説には、現代カナダの小説家ヒュー・マクレナンが「二つの孤

独(一九四五年)の中で鋭く問題にしたあの状況を予知させるような、フランス系とイギリス系とのあいまいな関係がすでに看取されるだけでなく、寒さの厳しいカナダ的環境も描かれている。初期のカナダ文学としては、探検家の書いた物語の中にもすぐれたものがある。ハドソン湾会社の貿易商サミュエル・ハインは、一七六九年から一七七二年にかけて、獲物を求めて各地をわたり歩くインディアンの狩人の一団と一緒に、ハドソン湾と北極海にはさまれたツンドラ地帯を徒歩で何度か旅をして回った。このときのことを記した話が、一七九五年に出版された「プリンス・オブ・ウェールズ要塞から極地の海への旅」である。これは、簡潔にして表現力に富む物語の典型であり、おそらくはカナダにおける真の文学性を備えた最初の作品といつて良いだろう。同系の内容のものには、すでに一六九〇年頃、ヘンリー・ケルシーが好奇心あふれる日記を書いている(ただし、出版されたのは今世紀に入ってから)。ケルシーという人は、インディアンの一隊に加わって西方へ旅した毛皮商人の卵

で、カナダの平原地帯を見た最初の白人である。彼はバッファロー狩りやグリズリー(灰色の大クマ)との戦いのことを素朴な二行連句で記録したが、これによって大陸の中心部のことを初めて英語で歌った詩人として後世に知られている。

このほか、一八世紀末から一九世紀の前半にかけて、何人かの旅行家が北極海へのカナダの旅や、太平洋への陸路の旅を見事な旅行記にまとめている。そのひとつ、ポール・ケーンが旅行画家としての自らの経験をまとめた「芸術家の放浪(一八五九年)は、アメリカ大平原地帯の原住民を描いたジョージ・キャットリンの初期の絵画と並んで、一八四〇年代のカナダ・インディアンの記録として特筆すべき作品になっている。

### 他

方、詩の方面では、初期の頃のカナダ詩人は形式上の獨創性を持たず、また内容においてもカナダの環境に直接的な反応をほとんど示さなかった。これはそもそも開拓者精神の裏返しなのであって、未知の土地で全く予想のつかぬ状況と未開の世界の脅威にさらされ、開拓者は自己を守るために旧知の文化をそのまま複製しようとした。ただ、「ジェゼベル」のようなヘビシージの詩に見られるように、ほんのときたま、借り物の伝統的形式を打ち破ろうとする情熱に出ることがある。チャールズ・サンクスタの詩の中で風景を歌った感動的な少数のアが書いた詩劇「テクムセ」(一八八六年)などには、作者がカナダの詩人はこの国

クロフォードの作品



の経験にこそ詩想を求めなければならぬと、かすかながら考えていたことが、初めて見てとれるのである。一八八〇年代以前には、こうした状況が一般的であった。わずかに唯一の例外が、イサベラ・バランシー・クロフォードであろう。クロフォードはビクトリア時代の未婚婦人で、その生活範囲も狭く、はかない人生を送った人であった。にもかかわらず、彼女は見たこともない未開地と、そこに住む原住民の生活を歌った。彼女のドラマチックなイメージと情熱に彩られた詩は、カナダではこれまでに見られぬものであり、そしてそれ以後においても、これと匹敵するものは少ない。

### 保

証と継続性を求める開拓者は、小説の世界でも歴史的な形式をとったが、一八八〇年以前に書かれたもので読み返すに値するカナダの小説は、単に伝統的というだけではなく、ゴシック趣味すれすれのロマンチズムに満ちたものが多い。カナダ生まれで、一八一二年の英米戦争に一六歳で参戦したジョン・リチャードソン少佐(このとき彼はシャウニー族の酋長テクムセがイギリスを支援して率いたインディアン軍と共に戦った)は、過去のカナダ史上事件と自分自身の目撃した経験とを題材をとった二冊のセンセーショナルな小説を書きあげた。一七六〇年代に起こったポンティアックの陰謀を扱った「ワクースタ」と、一八一二年の戦争を描いた「カナダの同胞た